

◆わが青春に悔いなし [1946年 東宝] (白黒 スタンダード 110分)

平成 30 年 2 月 24 日(土) 10:00 上映開始 (9:30 開場) 11:50 終了



[スタッフ]

脚本 久坂栄二郎
監督 黒澤明
製作 松崎啓次
撮影 中井朝一
照明 石井長四郎
録音 鈴木勇
音楽 服部正
美術 北川恵司

[出演者]

八木原幸枝	原節子
野毛隆吉	藤田進
八木原教授	大河内伝次郎
野毛の母	杉村春子
八木原夫人	三好栄子
糸川	河野秋武
野毛の父	高堂国典
特高 毒いちご	志村喬
文部大臣	深見泰三
宮崎教授	清水将夫
学生	田中春夫
刑事	岬洋二
令嬢	中北千枝子

[解説]

黒澤明監督の戦後第一作。モデルとなったのは京都大学の滝川事件(1933年)とゾルゲ事件(1941年)だが、後年の男性中心の黒澤作品に比べるとやや異質な感じを与えるのは、女性が主人公である点であろう。ファシズムの圧力に屈し野に下った大学教授の娘で、戦時下のさまざまな苦境にも屈することなく生きていく堂々たるヒロインとして、原節子が後の小津安二郎作品とは違った魅力を発揮している。脚本は久坂栄二郎はプロレタリア演劇の中心的存在として活躍した劇作家で、この年木下恵介監督も、久坂の脚本により『大曾根家の朝』という佳作を発表しているが、彼と組んだところに当時の黒澤監督の姿勢が表れている。ともあれ、戦後の「新しい時代」の高揚の中で制作されたことが良くわかる作品である。本作は、1946年3月から始まった東宝争議の第二次争議中に、日活系の劇場を使って封切られた。

◆酔いどれ天使 [1948年 東宝] (白黒 スタANDARD 98分)

平成30年2月24日(土) 14:30 上映開始 (14:00 開場) 16:08 終了



[スタッフ]

脚本	植草圭之助
脚本・監督	黒澤明
製作	本木荘二郎
撮影	伊藤武夫
照明	吉沢欣三
録音	小沼渡
音楽	早坂文雄
美術	松山崇

[出演者]

真田	志村喬
松永	三船敏郎
岡田	山本礼三郎
奈々江	木暮実千代
美代	中北千枝子
ぎん	千石規子
ブギを唄う女	笠置シズ子
ひさごの親爺	殿山泰司
セーラー服の少女	久我美子
婆や	飯田蝶子
親分	清水将夫

[解説]

戦時中、『姿三四郎』(1943)で鮮烈なデビューを果たした黒澤明監督は、戦後も『わが青春に悔いなし』(1946)や『素晴らしき日曜日』(1947)の成功で、日本映画の若きエース的存在となった。「キネマ旬報」ベストワンに輝いた黒澤の7作目にあたるこの作品は、闇市のヤクザと飲んだくれの貧乏医者との、不思議な友情と葛藤を描いたもので、強烈な個性を持つ若者とその観察者の設定や荒々しい映像表現の顕著さという点で、以後の黒澤映画のスタイルを決定づけたものと言える。前年に、谷口千吉監督の『銀嶺の果て』(黒澤脚本)でデビューしたばかりの三船敏郎が黒澤に初めて起用され、野生味あふれるその個性をいかんなく発揮し、以後の黒澤作品に欠かせぬ存在となったことは周知の通り。また、映像と音との対位的表現(雑踏の中の<カッコー・ワルツ>の使用やギター曲<人殺しの歌>など)を試みた黒澤にとって、この作品から参加した音楽家早坂文雄との出会いも幸運であった。

◆羅生門 [デジタル復刻版] [1950年 大映(京都)] (白黒 スタANDARD 88分)
平成30年2月25日(日) 10:00 上映開始 (9:30 開場) 11:28 終了



[スタッフ]

原作	芥川龍之介
脚本・監督	黒澤明
脚本	橋本忍
製作	箕浦甚吾
撮影	宮川一夫
照明	岡本健一
録音	大谷巖
音楽	早坂文雄
美術	松山崇

[出演者]

多襄丸	三船敏郎
真砂	京マチ子
杣売	志村喬
金沢武弘	森雅之
旅法師	千秋実
下人	上田吉二郎
巫女	本間文子
放免	加東大介

[解説]

黒澤は本作について次のように述懐している。「この作品の根本といえば、要するに、無声映画に帰ってみようと思ったことですね。……トーキーになって失われた映画の美しさをもう一度見つけようという気持ちだった。……映画ももう一度単純化しなければならないのじゃないか、というのがあの試みだった」。森の中で起きた殺人事件をめぐる、8人だけの登場人物で演じられる不条理劇。芥川龍之介の「藪の中」を、脚本家を志望していた橋本忍が脚色、黒澤の助言で同じ作家の「羅生門」が加えられた。絶対真理の不在と人間不信の主題は戦後間もない欧米で評価され、翌年のヴェネチア国際映画祭でグランプリ、そして米・アカデミー最優秀外国語映画賞を受賞した。1949年に湯川秀樹博士がノーベル賞を受賞し、敗戦後の日本に朗報をもたらしたが、黒澤のそれも日本映画の芸術水準の高さを海外に知らしめただけでなく、わが国の国際理解に大きく貢献した。「キネマ旬報」ベストテン第5位。

◆『用心棒』[1961年 東宝=黒沢プロダクション] (白黒 シネマスコープ 110分)
平成30年2月25日(日) 14:30 上映開始 (14:00 開場) 16:20 終了



[スタッフ]

脚本・監督 黒澤明
脚本・製作 菊島隆三
製作 田中友幸
撮影 宮川一夫
照明 石井長四郎
録音 三上長七郎
下永尚
音楽 佐藤勝
美術 村木与四郎

[出演者]

桑畑三十郎	三船敏郎
新田の卯之助	仲代達矢
めい	司葉子
清兵衛の女房おりん	山田五十鈴
卯之助の次男亥之吉	加東大介
馬目の清兵衛	河津清三郎
造酒屋徳右衛門	志村喬
百姓の小倅	夏木陽介
居酒屋の権爺	東野英治郎
名主多左衛門	藤原釜足

[解説]

ダシール・ハメットのハードボイルド小説『血の収穫』を大胆に翻案、西部劇の手法を取り入れながら、三船敏郎演じる浪人の痛快無比な姿を描いた黒澤明による大ヒット時代劇。舞台は上州、かつて絹市で栄えた宿場町も、今や跡目を巡る清兵衛一家と丑寅一家との抗争で、無法地帯と化していた。見回りの役人も、賄賂片手に見て見ぬふりの始末。そんな宿場に流れ着いた凄腕の浪人、自称・桑畑三十郎は、居酒屋の親父に一部始終を聞かされ、両家の親分に自ら用心棒として売り込みながら、彼らを手玉に取っていく。喧騒のさなか、狂犬のような丑寅の弟・卯之助が町に戻ってきた…。撮影は、東宝撮影所横の農地に巨大なオープンセットを建て、『羅生門』(1950年)以来の黒澤組となった宮川一夫カメラマンが、複数のカメラと望遠レンズを駆使し、シネマスコープの画面を意識した見事なフレーミングで、比類のない娯楽活劇に仕立て上げた。黒澤は翌年、続篇となる『椿三十郎』を発表。海外でも評判を呼び、盗作騒ぎも起きた『荒野の用心棒』(1964年、セルジオ・レオーネ監督)は、主演クリント・イーストウッドをスターへと押し上げるとともに、イタリア製西部劇(マカロニ・ウェスタン)のはしりとなった。本作の成功により、黒澤は世界の KUROSAWA の位置を不動のものとした。「キネマ旬報」ベストテン第2位。